

努力賞

争いの無意味さ

荒川区立第七中学校三年

田中 斐

拝啓

初秋の候、いかがお過ごしでしょうか。

私は最近、読んで驚いた絵本があります。

それは「もつとおおきなたいほうを」という絵本です。

ある王さまがきつねに向かってたいほうを撃つと、きつねがもつとおおきなたいほうで撃ち返してきて、双方むきになって争いだすという内容でした。

その本のどこに驚いたかというと、一度読んだことがあったその本に持った感想が昔とは違った

ものだったからです。

最初に出会ったのは小学三年生の頃で、先生から読みきかせをしてもらいました。先生がむきになる王さまときつねの様子を面白く読みきかせてくれて、結末も双方が仲直りするというものだったため、けんかをして仲良くなれるっていいな、などと思ったのを覚えています。

しかし改めて読んでみると、自分と重ねて考えさせられました。

私もくだらないことで人と張り合ってしまうことがあります。そして、それがくだらないほど終わりもないものです。この本を読んで、それは傍から見ると無意味で、こっけいで、少し残酷なことでだと思いました。どんなにくだらなくても争いは人を傷つけるからです。自分はそうありたくな

いと感じました。

絵本は幼い子どものためのものだと思いますがちだけれど、年齢が違えば、また違うものを感じさせてくれると知りました。

しかも、幼かった頃感じた事は間違いとか、的を射ていないとかではなくて、それぞれその時の学びになることを教えてくれているのだと思います。

それを気づかせてくれたこの絵本を、もっと大人になった時もう一度読み返してみたいです。

敬具